

# 第6回フォトフォーラム

## (2012年11月10日：有楽町朝日ホール)

主催：公益社団法人 日本写真家協会、朝日新聞出版 後援：文化庁

**【第一部】「写真で探るネイチャーワールド」：海野和男、鈴木一雄、吉野 信**  
**「写真というメディアについて」：田沼武能**  
**パネルディスカッション：海野和男、鈴木一雄、吉野 信、田沼武能**  
**司会：勝又ひろし**

### 海野和男 Kazuo Unno 「昆虫を撮る」

大学を卒業してフリーの昆虫写真家になって以来、40年間に亘って昆虫を撮ってきました。種類にすると延べ10,000種ぐらいいは撮ったでしょうか。なかでも「擬態」をテーマに、葉や枝などに擬態する昆虫を追いかけて世界中を撮り歩いています。

昆虫が実際の自然の中で生きている様子を伝えたいと考え、人物を写すときと同じように背景も写し込めるように、機材や撮り方にも工夫を重ねてきました。昆虫をクローズアップにしながら背景までも写せるレンズを探していた1980年代前半に、最短で15cmまで寄れる魚眼レンズに出会ったことがその後の表現の基礎になっています。また、昆虫の素早い動きを止めるために日中にストロボを発光させる技法なども駆使し

ています。なお、撮像素子の小さなデジタルカメラの登場によって、ピントの深い写真が簡単に撮れるようになったため、10年以上前から基本はすべてデジタルに切り替えています。

500万種とも3,000万種ともいわれる昆虫は地球上の生命の主役であり、これから昆虫の写真を通じて、地球にはさまざまな生物が生きていることや、身の回りの自然を記録する楽しみを、子供たちを含む多くの人に伝えていければと思っています。



【うんの・かずお】1947年東京都生まれ。昆虫を中心とする自然写真家。東京農工大学の日高敏隆研究室で昆虫行動学を学ぶ。大学時代に撮影した「スジグロシロチョウの交尾拒否行動」の写真が雑誌に掲載されたのを契機にフリーの写真家の道を歩む。アジアやアメリカの熱帯雨林地域で昆虫の擬態を長年撮影。1990年から長野県小諸市にアトリエを構え身近な自然を記録する。NHKなどのテレビ番組にも出演。日本自然科学写真協会会長、日本昆虫協合理事、(公社)日本写真家協会会員。

### 鈴木一雄 Kazuo Suzuki 「自然界の“聲”を受け止め、“自分史”へつなぐ」

自然界が発しているいろいろな“聲”を聞き、受け止めながら、それらを映像表現することを基本姿勢として、尾瀬、裏磐梯、小国（おぐに）、全国の桜などを作品としてまとめあげてきました。

風景というとは一般には美しさを中心とした「美の聲」が主要なテーマとして捉えられることが多く、写真愛好家も鮮やかな映像を追いかける傾向にあります。私は「美」以外に、たとえば折れた桜がなお立ち上がろうとする「命の聲」であったり、古い峠道などの風景が持つ「歴史の聲」、厳しい自然環境でも命をつなぐ「環境の聲」、季節が持つ物語としての「季の聲」などの存在を自然から教えてもらっています。

アマチュア写真家の皆さんも、美しい映像だけを求め

るのではなく、身近なところから発せられるいろいろな声を聞いて、感動しながら撮ってみると幸せになれるのではないのでしょうか。

また以前から、写真を撮っているのであればそれらを自分史として残そうじゃないか、という提案活動をしています。自分史作りを通じて人生を振り返り後世に記録を残すことで、この豊かな時代に幸せな時間を過ごしなが、最期まで充実した写真人生を送れるのではないかと考えています。



【すずき・かずお】1953年福島県生まれ。法政大学法学部卒。フォト寺子屋「一の会」主宰。日本各地の風景を新しい視座と鮮烈な映像で発表し、新境地を拓く。写真集・写真展に「一日本列島一季乃聲」「櫻乃聲」「おぐにの聲」「裏磐梯の聲」「尾瀬の聲」「尾瀬しじまの旋律」「裏磐梯彩景」、著書に『デジタル露出の極意』『風景写真の極意』など多数。「写真による自分史つくり」の普及活動に力を注ぐ。(公社)日本写真家協会会員、日本自然科学写真協会会員。



2012年11月10日、第6回フォトフォーラムが、主催・公益社団法人日本写真家協会、朝日新聞出版、後援・文化庁、および協賛9社により、有楽町朝日ホール(東京都千代田区)で開催されました。今回は初の二部構成とし、第一部は「写真で探るネイチャーワールド」および「写真というメディアについて」をテーマに、海野和男氏、鈴木一雄氏、吉野信氏、田沼武能氏を招いて、それぞれの講演と『アサヒカメラ』編集長の勝又ひろし氏を進行役とするパネルディスカッションを行いました。第一部来場者479名。

## 吉野 信 Shin Yoshino 「自然との共鳴」

動物写真を撮り始めたのは40年ほど前のことです。自分なりに「自然は神、野生は友」というキャッチフレーズを掲げて、世界中を回っていろいろな写真を撮ってきました。日本で野生の動物写真を撮るのはそれほど簡単ではありませんが、アフリカに行けば今でもだいたいの動物が撮れます。ただ、どんな出会いがあるかはその場に行ってみないと判りません。狙って撮ることもありますが、キリンが山のかなたから歩いてきたりと、動物写真の場合はほとんど偶然です。

偶然であっても、自分の魂が共鳴する被写体と向き合えたときは、すごく幸せを感じますし、なによりも、いいシャッターチャンスに恵まれるには、やはりいつもカメラを持っていてその場にいることが大切だと思います。

最近は動物以外にも目を向ける機会も多く、水と樹

木が生み出す造形や、野鳥などの撮影にも取り組んでいます。

デジタルになったおかげで、たとえば感度を上げて高速なシャッターを切れば滝の水しぶきやハチドリ羽ばたきも捉えられ、フィルム時代では成しえなかった世界が表現できるようになりました。

それでも、本来は記録である写真にいかにか芸術性を持たせるかは、個人の感性の問題です。皆さんもぜひ写真を楽しんでください



【よしの・しん】1943年生まれ。桑沢デザイン研究所リヴィングデザイン科卒業。1972年にフリーの写真家としてスタートして以来、日本だけでなく世界中を飛び回りながら、野生動物や自然景観を撮影し続けている。主な写真集に、『アラスカの詩』、『ロッキーの野生』、『アクアオデッセイ』、『タイガーオデッセイ』、『自然美術館シリーズ・全5巻』。著書に『ネイチャーフォト入門』、『アフリカに行く』などがある。(公社)日本写真家協会会員、(公社)日本写真協会会員。

## 田沼武能 Takeyoshi Tanuma 「私の修業時代」

フォトジャーナリズムの世界に入って戦後の時代の変化を写真に収めたいと考えて、名取洋之助さんが主幹を務めていた『週刊サンニユース』に面接に行ったらその場で採用が決まりました。ところがすぐに休刊になってしまい、しょうがないので、『週刊サンニユース』の会社に残っていた木村伊兵衛さんに頼み込んで、押し掛け的に助手にしてもらいました。

とはいえ僕なんかのところに仕事なんか回ってくるわけではないので、頼まれもしないで、銀座とか渋谷とか浅草とかあちこちに行っては一所懸命その時代を撮っていました。それが今になって、その当時の作品が大変貴重なものとして評価されるようになっていきます。いくら偉そうなことを言っても、写真は撮らない限りな

にも残らないんだということをつくづく感じます。

写真は時代とともに変化していきますが、変化に流されるのではなく、今日お話をされた3人の写真家のように、やはり自分の心を打つものを撮ることが重要です。

また、そうした写真を、50年後、100年後の後世に伝えるために、当協会では「写真保存センター」を設立し運営を開始しています。写真を愛している皆さんも一緒になって支え、写真の保存に協力していただければありがたく思います。



【たぬま・たけよし】1929年東京都生まれ。東京写真工業専門学校卒業。1949年にサンニユースフォトスに入社して木村伊兵衛氏に師事。『芸術新潮』や『タイムライフ』の囑託などをを経て1972年からフリーランスとなる。ライフワークとして、世界の子どもたち、人間のドラマ、武蔵野の自然、文士・芸術家の肖像などを撮り続けている。写真展・写真集とも多数。1995年から(公社)日本写真家協会会長。1979年モービル児童文学賞、1985年菊池寛賞、1990年紫綬褒章、2002年勲三等瑞宝章、2003年文化功労者顕彰。

# パネルディスカッション

パネリスト

海野和男  
鈴木一雄  
吉野 信  
田沼武能

司会：勝又ひろし（『アサヒカメラ』編集長）

第一部でお一人ずつの講演が終わったあと、本フォーラムを共催した朝日新聞出版にて『アサヒカメラ』誌の編集長を務める勝又ひろし氏を司会進行役として、パネルディスカッションを行いました。

**勝又** 『アサヒカメラ』の読者アンケートでもネイチャー写真に興味を持っている方はとても多いという結果が出ていて、写真ジャンルのいわば王道のひとつといえます。

まず具体的な撮影方法について伺います。先ほど吉野さんは「動物はアフリカに行けばすぐに撮れる」といったお話をされていましたが、実際はどうやって撮っているんですか。

**吉野** 以前は撮影に出たら数ヶ月は帰ってこないのが当たり前でしたし、同じ場所に季節を変えて行くこともあります。アメリカのように自分で運転できるところは自分でキャンプしながら移動しますし、アフリカやインドでは現地のガイド兼ドライバーを付けます。ベンガルトラなどは彼らがいたおかげでいい写真が撮れたと思っています。もっとも、写真を始めた頃は海外には行けませんでしたから、動物園に行って動物を撮る勉強をしていました。

**勝又** 次は鈴木さんに。風景はほかの人と同じ撮影ポイントで撮ることも多くなってしまうと思いますが、どういう視点でアングルを選んでいるのでしょうか。

**鈴木** 現場に行くと「先生どのポイントがいいですか。どこが一番ベストですか」という質問が必ず出るんですけれども、ベストワンを求めてはいけな<sup>い</sup>と思うんですね。講演でも話したように、被写体の「<sup>こゝろ</sup>聲」を聞きながら、いいなと思った旬の景色を撮るのが一番心がこもると思うんです。足元の水滴かもしれないし、望遠で遠景かもしれないし、広角で全景かもしれない。露出の問題も含めて、どういう「絵」を心の中に描けるか、でしょうね。

**勝又** 海野さんは、現地に行けば撮りたい昆虫がすぐ



に見つかるんですか。

**海野** 昆虫は世界中どこにでもたくさんいるので、下調べしなくてもなんとかなりますね。現地でレンタカーを借りて1ヵ月ぐらいあちこちを回っていると、どこにどんな虫がいるだろうというのはだいたい判るんで、あとは行き当たりばったりという感じで。それくらい虫はたくさんいます。

**勝又** 田沼さんは人間を撮っているというイメージがありますか。

**田沼** 僕だって風景は撮りますよ。武蔵野を何十年と撮っているんですからね。人間を撮るのと同じで、風景にも、呼吸があったり、動きがあったり、ドラマがあるわけで、それらを自分なりに見つけ出して感動して撮るってことだと思いますね。それに、いい写真を撮ろうと思ったらやっぱり自分の足で歩かなきゃだめで



こどものチャンバラ 深川木場 東京 1956年 撮影：田沼武能

すよ。どこそこに行ったらなにになにが撮れると判っているものを撮ったって面白くないんでね。

**勝又** カメラがフィルムからデジタルになって、撮り方や撮れる対象がずいぶん変わってきたと思います。デジタル化がもたらした変化についてお聞かせください。

**吉野** 感度を上げて速いシャッターを切れるようになったので、動きの速い被写体でも止めて撮れるようになりました。しかも感度を上げてノイズが出なくなった。こういった点は大きなメリットだと思います。ただ自然風景だけは、あえて逆行するように、シノ





神宿の大樹 (群馬県)

撮影：吉野 信

ゴ(4×5)のフィルムで撮るようにしています。

**海野** デジタルになっても撮り方は基本的には変わっていませんが、吉野さんが言われたように高感度が強くなったので、ストロボを使わずに撮る機会が増えました。それにフィルムに比べて簡単に撮れるようになって、特殊だった昆虫写真が一般の人にも楽しめるようになったのは、デジタルがもたらしたメリットのひとつでしょう。

**鈴木** フィルムは人生と同じでやり直しがききませんが、デジタルはその場でパッと液晶で確認できてしまう。実はアマチュアの方にアンケートをとると、「デジタルになって失敗は少なくなったけれども、前よりつまらなくなった」という人が多いんです。家に帰るまでは背面液晶は絶対に見ないぐらいの気持ちで、フィルムと同じように「一写入魂」で撮るといった心構えが必要かもしれません。便利になったから幸せになれるというわけではないんですね。



写真集「日本列島一季乃聲」より「開」

撮影：鈴木一雄

**田沼** 僕も写真に緊張感がなくなったと感じています。鈴木さんが言ったように、すぐ液晶で見て、ダメならもう一回撮り直せばいいやと。フィルムの頃はもっと緊張しながら撮っていたはずなので、それが消えちゃったというのがデジタルの問題点だと思いますね。

**勝又** ネイチャー写真では撮る人のマナーの問題が多く指摘されます。

**鈴木** 次の人が撮れないようにと、自分が撮り終わったあとで、花を切ったり氷を割ったりという話なども

聞きます。自然を愛するのであれば、自然を傷つけないようにするというのが基本的なマナーだと思うんですが、残念ですね。

**海野** 定年退職後に昆虫採集を始める人が増えていますが、その人たちのマナーがとても悪い。保護している場所でも平気で採っていつちゃう。一言でも注意すると、今度は「海野さんに怒られた」って言い出す始末ですから。

**田沼** 過去のコンテストで受賞した作品を再応募する輩がいて、見つかったら「すみません、以前の受賞を忘れてました」でおしまいなんです。受賞した作品を忘れるわけないんだから明らかにウソなわけで、こういうのが一番マナーが悪い。皆さん、もっと大らかに写真を撮って、大らかに写真を楽しみましょうよ。人を騙してまで賞を取ろうとするのは泥棒と同じです。

**勝又** 最後に、ネイチャー写真に関してアドバイスがあればお願いします。

**海野** 都会であっても身近な自然に目を向けて撮っていくとすごく楽しいと思います。それにデジタル化によって撮影が易しくなったこともあるので、ぜひ昆虫写真にもトライして楽しんでいただきたいと思います。



竹富島のカバマダラ 花の多い島はチョウの楽園 1981年

撮影：海野和男

**吉野** 常識は時代とともに変わっていきますけど、ネイチャーというのはやはり「自然」のことですから、写すほうもコンテストを主催するほうも「ネイチャーとは何か」ということをしっかり踏まえた上でやってもらいたい。写真を撮る心構えとしては、頑張るのではなくて、楽しむほうがいいんじゃないかと思います。

**鈴木** 撮り始めた頃は楽しくても、たとえば同じ写真クラブの中で、「あいつが賞に入った」とか「あいつのほうが上手いと思われている」など、他人との比較や競争が入ってくると、だんだんとつまらなくなってしまいます。会社での競争とは違うんですから「人は人、自分は自分」として取り組んでみてはいかがでしょうか。

**勝又** パネリストの皆さんのこれからのご活躍とご健勝をお祈りいたします。本日はどうもありがとうございました。

# フォトフォーラム【第二部】

## 「魅せる鉄道写真」：中井精也、山崎友也



フォトフォーラムの第二部では「魅せる鉄道写真」をテーマとし、テレビ番組等でも活躍中の中井精也氏と山崎友也氏をお招きし、新たな鉄道写真に取り組むお二人の講演を行いました。来場者の年齢層も若く、お二人のプレゼンテーションにもユーモアがあり、第一部とはまた違う雰囲気での開催となりました。第二部来場者361名。

### 中井精也 *Seiya Nakai* 「僕とカメラと鉄道と」

鉄道と写真が好きで、中学では鉄道研究会に入って鉄分の濃い青春を過ごすわけですが、鉄道車両を中心としたいいわゆる鉄道写真を当時の彼女に見せると、「中井君って電車が好きなんだね」と冷たいリアクションしか返って来なかったんです。ところが、風景の中の鉄道とか、お花と列車とか、そういう写真を見せると、「わあ、行ってみたい」とか、「かわいい」とか言ってくれた。そのときに僕の鉄道写真のコンセプトが決まったんですね。

要は、鉄道に興味がない人でも魅力を感じてくれる写真を撮ろうと。しかも、鉄道に興味のない人でも魅力を感じてくれる写真と、僕の撮りたかった写真とがイコールで、本当に幸せなことだなとつくづく感じています。

最近では、ローカル線が持つゆったりとした空気の流れ

を被写体にした「ゆる鉄」や、鉄道で旅をしながら出会った人に夢を託く「DREAM TRAIN」といったシリーズに取り組んでいます。

これまで、僕の師匠である真島満秀先生や、鉄道写真の第一人者である廣田尚敬先生<sup>なおたか</sup>などの写真集を通じて、たくさんの方の事を学んできました。これからは若い世代の人たちが、僕らの写真を見て、同じように「こういう鉄道写真を撮りたいな」と思ってもらえたらいいなと思っています。



【なかい・せいや】1967年東京都生まれ。成蹊大学法学部卒業後、写真専門学校を経て、鉄道写真家の真島満秀氏に師事。独立後、2000年に山崎友也氏と有限会社レイルマンフォトオフィスを設立。鉄道車両だけにこだわらず、鉄道に関わるすべてのものを被写体として独自の視点で鉄道を撮影し、「1日1鉄!」や「ゆる鉄」など新しい鉄道写真のジャンルを生み出している。広告や雑誌などの撮影のほか、講演やテレビ出演など、幅広く活動している。(公社)日本写真家協会会員、日本鉄道写真作家協会副会長。

### 山崎友也 *Yuya Yamasaki* 「魅惑の鉄道写真」

中井とは同じ事務所で、それぞれでテーマを決めて、鉄道写真のいろいろな表現を模索しながら、鉄道写真の裾野を世の中に広げようとして取り組んでいます。

鉄道写真にはいろいろな形がありますが、すいぶん前からライフワークとして取り組んでいるテーマが、日没から日の出までの間に撮る「夜感鉄道」です。

食べるのに必死だった若い頃は昼間は仕事をこなすのが精一杯で、自分が撮りたい写真を撮るのがどうしても夜になるので、それで撮り始めたんです。日没後のかすかな明るさとか、イルミネーションとか、月明かりとか、そういう中で鉄道を撮るのですが、夜なのでたくさんは撮れません。一枚ずつ渾身で撮っていくと、写真の訴える力がより強く感じられるのではないかと思います。

しています。そうした写真ばかりでは撮るほうも観るほうも疲れてしまいますから、スナップ的な写真もよく撮ります。とくに鉄道と人を絡めて撮るのがすごく好きなので、通学中の学生さんにモデルになってもらうこともあります。

鉄道写真には、車両だけではなく、人がいたり、花や動物がいたり、季節感もあったり、いろいろな捉え方があります。皆さんも自由な発想で楽しい鉄道写真を撮っていただきたいなと思います。



【やまさき・ゆうや】1970年広島県生まれ。日本大学芸術学部写真学科を卒業後、真島満秀写真事務所を経て1988年に独立。2000年に鉄道専門のフォトライブラリーである有限会社レイルマンフォトオフィスの中井精也氏と設立。JR各社や私鉄各社のポスターやカレンダーの撮影をはじめ、TV出演や講師・講演など幅広く活躍中。鉄道写真界の掌握を虎視眈々と目指している。(公社)日本写真家協会会員、(公社)日本写真協会会員、日本鉄道写真作家協会会員。



## 協賛9社による 最新機材・技術展

フォトフォーラム会場ロビーにて開催(10:30~18:00)

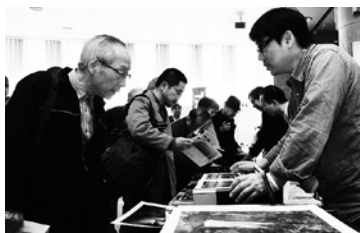
協賛: エプソン販売(株)、オリンパスイメージング(株)、キヤノンマーケティングジャパン(株)、  
(株)ケンコー・トキナー、(株)シグマ、(株)タムロン、(株)ニコンイメージングジャパン、富士フイルム  
イメージングシステムズ(株)、ペンタックスリコーイメージング(株) (50音順)



第6回フォトフォーラムの会場となった有楽町朝日ホールのロビーでは、協賛9社による機材・技術展が開催されました。今回のフォトフォーラムでは、第一部がネイチャー写真、第二部が鉄道写真と、アマチュア写真家にとって親しみやすいテーマを掲げたことで聴講者も多く、講演の休憩時間などに各社のブースを訪れて、

最新機材に熱心に見入りながら説明担当者の説明に対して活発に質問を发していました。(公社)日本写真家協会もブースを設け、写真集『生きる』や『スナップ写真のルールとマナー』の書籍販売と、「日本写真保存センター」の運営を対象とした募金活動を行いました。

(記/関 行宏・倉持正実、撮影/桃井一至)



エプソン販売(株)



オリンパスイメージング(株)



キヤノンマーケティングジャパン(株)



(株)ケンコー・トキナー



(株)シグマ



(株)タムロン



(株)ニコンイメージングジャパン



富士フイルムイメージングシステムズ(株)



ペンタックスリコーイメージング(株)